

# 幼児の「性自認時期」と「対人スタンス」との関係

—幼稚園3歳児クラスの観察から—

比較教育社会学コース 大滝世津子

Infants' Gender Identification and Social Relations: Observation of a Kindergarten Class

Setsuko OHTAKI

Focusing on two classes of as well as their teachers of three-year-old children as well as their teachers in a kindergarten, this research, which was held between April to October 2005, investigates how gender consciousness among children are related to their social relationships with teachers and peer groups. The research finds out that a majority of the children did not have any gender identity before entering the kindergarten, and there is no clear evidence to show that sex or date of birth are related to the time when children identify their gender. However, before entering the summer vacation at July, most of the children already have clear gender consciousness. The research then shows that children will recognize their gender identity earlier if they prefer playing within a group and communicating more with teachers. On the contrary, for those children who prefer to play alone or to keep a distance from teachers, they will identify their gender later. In addition, for those children who always stick to teacher but prefer to play alone, they still have earlier gender consciousness.

## 目 次

### I. 問題設定

#### A. 目的

B. 何をもって性自認とするのか

### II. 課題構成

### III. 対象と方法

#### A. 対象

#### B. 方法

### IV. 結果

#### A. 各幼児が性自認したのはいつか(SQ1)

#### B. 各幼児の性自認時期は性別・年齢・誕生日順・

兄弟姉妹の有無と関係があるか(SQ2)

#### 1. 性別との関係

#### 2. 年齢との関係

#### 3. 誕生日順との関係

#### 4. 兄弟姉妹の有無との関係

#### C. 各幼児の対人スタンスはいかなるものか(SQ3)

#### 1. 保育者との関係のもち方

#### 2. 仲間との関係のもち方

#### D. SQ1と3の関係はどうなっているのか(SQ4)

### V. 結論(考察)

### I. 問題設定

#### A. 目的

本研究は幼稚園3歳児クラスにおける幼児と保育者および仲間とのスタンスのとり方と性自認時期の関係を明らかにすることを目的とする。

これまで教育社会学においては、幼児のジェンダーの社会化に関するいくつかの研究が蓄積されてきた。これらの研究においては、そもそも性自認がいかにして受け入れられ、個人の中で固定化していくのか、そのきっかけやプロセスについてはほとんど扱われてこなかった。

一方で、心理学の分野では性自認について多くの研究および理論が蓄積してきた。これに対し、大滝(2006a)は、これらの心理学的先行研究においては「性自認には社会の影響がある」という点について指摘されながらも、①家庭外、かつ②一対集団関係、における性自認メカニズム、③幼児の具体的な相互行為と性自認の関係、④幼児間の多様性、については必ずしも明らかにされてこなかった、また、⑤幼児の性自認がなされた社会的背景の変化については考慮に入れられ

てこなかったことを指摘し、以下のような理由からこれらの視点を導入して幼稚園における研究を行った。

すなわち、かつての幼児は幼稚園入園前に同性集団(同性のみで形成された集団)・異性集団(自分にとっての異性のみで形成された集団)・男女混合集団(男女混合で形成された集団)に接することにより性自認に至った側面があったと考えられるが、少子化により兄弟姉妹数が減少し、また地域の連帯力も低下している今日において幼児が初めて同性集団・異性集団・男女混合集団に出会うのは幼稚園である場合が多いと考えられる。そのため、現代の幼児の「性自認」に対して幼稚園が果たしている役割は大きいということである。

その結果、幼児の性自認は幼稚園における集団の影響をも受けてなされるものであることが推察され、幼児はクラス内集団の影響を受けたことで、年齢とは独立した独自の発達を遂げていることが明らかにされた。

この次の段階として大滝(2006b)では「幼稚園3歳児クラスにおいて各幼児が幼児同士の集団と接することにより、どのようなメカニズムで性自認したのか」ということが明らかにされた。

これらはクラス内においてどのようなスタンスで他者と接している幼児がいつ性自認するのか、という各幼児のもつ性質の側面については明らかにしていない。しかし、幼児期の性自認メカニズムについて詳細に解明しようとするならば、この点を明らかにすることが重要である。そのため本研究はこの点を明らかにすることを目的とする。

## B. 何をもって「性自認」とするのか

以上のように、本研究は大滝(2006a)の議論の次の段階を明らかにするものとして位置づく。そのため、用語の定義等は大滝(2006a)と同じものを使用する。したがって、以下に大滝(2006a)において使用されている定義を簡単にまとめる。詳細については大滝(2006a)を参照されたい。

本研究においては「性自認」という概念を使用する。これは英語では“gender identity”という概念であるが日本においてはいくつもの訳語があり曖昧なものである。

この曖昧さを極力排除して自覚的に論じていくために「性自認」を主体形成の一部と考え、J.バトラーの主体形成に関する議論を援用すると、幼児の「性自認」は「呼びかけ」(=「オンナノコ／オトコノコ」と呼びかけられたときに振り返ること)、「ふるまい」(「女らしい／男らしいふるまい」をすること)、「ことば」(「女らし

い／男らしいことばづかい」をしていること、性別に関する言葉を発すること)の3つの次元の反復によって形成される、と考えられる。

この中で、本研究においては「性自認」の中の「呼びかけ」の次元のみをとりあげ、その他の2つの側面については取り上げない。本研究が採用する、幼児が「性自認」した、とみなすクライテリア(=ものさし)は、「呼びかけ」、すなわち、ある幼児が「オンナノコ／オトコノコと呼びかけられた時に振り向いたこと」とする。

本研究においてはこのクライテリアを使用して後述するような実験を行うことにより、各幼児が「性自認」したか否かを測定する。その際、実験を行う際の便宜の関係上、前述の定義を少々変換し、先生が幼児に対して「『オンナノコ／オトコノコこっちに来て』と呼びかけたときに先生のところへ行ったこと」をもって「性自認した」と定義する。

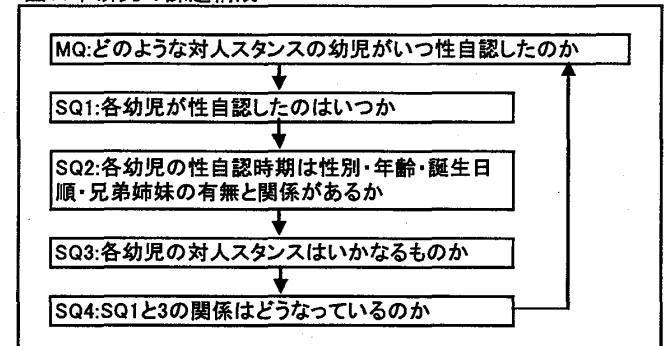
## II. 課題構成

以上より、本研究は以下の点を明らかにすることを課題とする。本研究は「どのような対人スタンスの幼児がいつ性自認したのか」という問い合わせをメイン・クエスチョン(以下MQ)としている。しかしこの問い合わせは抽象度の高い問い合わせであるため、この問い合わせを解くためにはいくつかの検証可能な問い合わせ(サブ・クエスチョン。以下SQ)にブレイクダウンする必要があると考える。そのため本研究を左の図のように設定する。以下では図1に沿ってMQとSQについて論じる。

本研究のMQを明らかにするためには、前述のものさしを使用して、「SQ1：各幼児が性自認したのはいつか」を検討する必要がある。これにより各幼児の性自認時期を示す。

その上で、擬似相関の可能性を確認するために予め「SQ2：各幼児の性自認時期は性別・年齢・誕生日順・

図1:本研究の課題構成



兄弟姉妹の有無と関係があるか」を検証し、これによりこれらの要素は性自認時期と関係がないことを示す。その上で「SQ3：各幼児の対人スタンスはいかなるものか」を「対保育者」「対仲間」別に検証する。最後に「SQ4：SQ1と3の関係はどうなっているのか」を分析し、両者の関係を示す。これによってMQを明らかにする。

### III. 対象と方法

#### A. 対象

本研究は神奈川県X市にある学校法人Q幼稚園の3歳児クラス2クラス(R組, K組)に属する全幼児(R組:女児7名・男児8名, K組:女児7名・男児9名)及び担任保育者を対象とした<sup>1)</sup>。Q幼稚園は①児童中心主義を採用している②特定の宗教の影響を受けていない、という点では日本における一般的な幼稚園と共通の要素を有している。一方で、「自由遊びを中心の指導をしている」という点では、「一斉指導を中心としている幼稚園が多い中で異なる存在である。

しかしながら本研究の目的からすれば、「幼児同士の関係」についても重点的に観察することが望ましい。その際、自由遊び場面が多いQ幼稚園は「幼児同士の関係」を見られる場面が多い、という点で対象として有効な幼稚園であると考えられる。以上のような理由から、本研究においては対象としてQ幼稚園を選定した。

なお、Q幼稚園における3歳児クラスは全部で4クラスある。いずれも先生は女性で、30代前半が3名、40代後半が1名である(R組:40代後半, K組:30代前半)。また教室は1階に2クラス、2階に2クラスある。クラスの人数は各クラス15~16名となっている。教室の広さは2階の2クラスが狭く、1階の2クラスが広い(R組:2階, K組1階)。

こうした状況の中で、R組とK組は先生の年齢、教室の階、教室の広さなどにおいて最も対極にあると考えられる2クラスである。そのため同じ年少組であっても違いがでるとすれば最も大きな差がでるのではないか、また、それでも共通の結果が出た場合にはより一般性に近づくのではないか、という考えのもとこの2クラスを選定した。

#### B. 方法

幼稚園3歳児クラスにおいて以下のような実験および観察を行った。

#### <性自認した時期を測定するための「実験」>

本研究においては「幼児が性自認した日」を見るため、前述の「性自認のものさし」を用いて以下の実験を行った。

- ① 先生に依頼して、幼児全員を先生を中心とした半円状に集めてもらった。
- ② 先生に依頼して、「○○ちゃんどうぞ」と幼児の名前を1人ずつ呼んでもらい、先生のところへ行ったかどうかを記録した。
- ③ 先生に「オナナノコきてー／オトコノコきてー」と言ってもらい、誰が先生のところへ行ったかを記録した。
- ④ ①~③を毎月1~2回(4月から10月まで)行い、記録してその変化を見た。

#### <各幼児の対人スタンスを見るための観察>

本研究においては「各幼児の対人スタンス」を見るために以下の観察を行った。まず観察時期は2005年4月~2005年10月であり、観察頻度は週2回、原則として月曜日にR組、火曜日にK組を観察した。

また、観察データの記録方法は以下の通りである。観察にあたっては、3歳児クラスの教室に手のひらサイズの小さなメモ帳とボールペンのみを持って入り、データを記録した。その際、観察の視点としては、3歳児クラスの幼児の生活全般を網羅的に観察したが、その中で特に幼児同士の相互行為場面については重点的に観察した。

なお観察の際、筆者は幼児にとっては「せんせい」という立場で観察に入った。これは幼児にとってクラスにいる大人は「せんせい」であるという認識が自然である、という幼稚園側の判断によって決定された。

最後に、観察の際の具体的な筆者の幼児との関わり方であるが、6月末までは、R組・K組とともに、幼児と接することが多かった。R組においては10月まで一貫して同じスタンスをとった。一方K組においては幼児の状態が不安定だったため、担任の先生との話し合いにより、途中(7月上旬)から、なるべく幼児と接しないスタンスに徹した。

### IV. 結果

#### A. 各幼児が性自認したのはいつか(SQ1)

では前述したものさしで測定すると、各幼児はいつ性自認していたのだろうか。

表1は、R組の各幼児が性自認した日を見るために作成した表である。列に各幼児が性自認した月・日、

表1:R組の幼児がはじめて性自認した日

月	日	サエ	ナツ	ミト	アミ	リオ	レイ	ユキ	マリ	タカ	フミ	ミチ	レオ	ケン	ナオ	タツ	ユズ	ハナ	リツ
4	8																		
	11																		
4	18	●	●	●	●														
	20																		
	25																		
	2																		
5	9																		
	15																		
6	1																		
	6																		
6	13																		
	20																		
	27																		
7	4																		
	11																		
8	8																		
	9																		
10	10	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

行に各幼児名を性自認が早い順に並べ、あてはまるセルに●を記入したものである。なお、名前にグレーがかかっているのが女児、かかっていないのが男児(以下名前にグレーがかかっている場合は全て同様)である。

ここでは4名全員が同じく4月18日の時点で性自認していた。次に2名が5月9日に性自認し、一週間後の5月16日に1名が性自認した。そして、一ヶ月以上空いた後、2名が6月20日に性自認し、その一週間後の6月27日に1名が性自認した。最後に、その一週間後の7月4日に5名が同時に性自認した。

表2は、表1と同様の方法でK組の各幼児が性自認した日を見るために作成した表である。

表2:K組の幼児がはじめて性自認した日

月	日	ダン	ミト	キラ	ユキ	ビン	マリ	タカ	フミ	ミチ	レオ	ケン	ナオ	タツ	ユズ	ハナ	リツ	
4	12																	
	19	●	●															
	26																	
	3																	
5	10																	
	17																	
	24																	
	31																	
6	7																	
	14																	
	21																	
	28																	
7	5																	
	12																	
	19																	
	26																	
8	3																	
	10	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	x	↓	↓	↓	x

表3:男女別3歳児クラス全体の幼児がはじめて性自認した日

	女の子									男の子																											
	サエ	ナツ	ミト	アミ	リオ	レイ	ユキ	マリ	タカ	フミ	ミチ	ユズ	ハナ	ミカ	サト	シン	レン	ダン	キラ	ビン	タカ	レオ	ケン	ナオ	タツ	トシ	ジン	ダイ	ヨウ	トモ	タク	リツ					
4	●	●	●													●	●	●	●																		
5				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	▲																							
6																●	●	●	●																		
7																																					
8																																					
9																																					
10	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	x	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	x				

ここでは2名が4月19日の時点で性自認していた。その一週間後の4月26日に1名が性自認した。その二週間後の5月10日に3名が同時に性自認した。そしてさらにその二週間後の5月24日に6名が同時に性自認した。そしてそれから1ヶ月以上たった6月28日に1名が性自認した。そして、2名は迷いながらも10月に至っても性自認をしていなかった。また、1名は4月から10月まで一貫して性自認をしていなかった。

## B. 各幼児の性自認時期は性別・年齢・誕生日順・兄弟姉妹の有無と関係があるか(SQ2)

### 1. 性別との関係

前節の結果から3歳児クラスの各幼児の性自認時期が明らかになったが、この性自認時期が早いか遅いかの違いはどのような要因によって生じているのだろうか。

これにはさまざまな要因が考えられるが、日本保育学会(1970)において「性別自認に性差がある」という報告」がなされており、それによると「3歳では、男児の70%が自認できるのに対して、女児は40%しか自認できない」という。これを手がかりに、性自認時期に男女差があるのかについて見てみよう。

表3は、これを見るために作成した表である。これによると男女とも月ごとの人数の推移パターンは酷似しており、男女で明らかな差は見られなかった。以上のように、男女による大きな差は確認されなかった。

### 2. 年齢との関係

しかし以上の結果からでは「3歳では、男児の70%が自認できるのに対して、女児は40%しか自認できない」(日本保育学会 1970)という先行研究の報告については検証できていない。したがって、以下でこの点を検証する。

表4は各幼児の性自認時の年齢が3歳であったか4歳であったかを見るために作成した表である。3歳で性自認した子は24名、4歳で性自認した子は4名、性

表4:3歳児クラス全体の各幼児の性自認した年齢

	3歳で性自認した	4歳で性自認した	性自認していなかった
女	ナツ・サエ・アミ・リオ・サト・ミカ・ミト・マリ・フミ・ミチ・ハナ	レイ・ユキ	ユズ
男	レン・シン・トシ・ジン・ダイ・トモ・タク・ダン・キラ・ビン・レオ・ケン・ナオ	ヨウ・タカ	タツ・リツ

表5:3歳児クラス全体の各幼児の性自認した年齢(割合)

	3歳で性自認した	4歳で性自認した	性自認していなかった	合計
女	79%	14%	7%	100%
男	76%	12%	12%	100%
合計	77%	13%	6%	100%

自認していなかった子は3名であった。いずれも男女による大きな差はみられなかった。なおかつ、ほとんどの幼児は3歳で性自認していた。

表5は、表4の各セルのパーセントを把握するために作成した。3歳で性自認した女の子は79%，男の子は76%，4歳で性自認した女の子は14%，男の子は12%，性自認していなかった女の子は7%，男の子は12%であった。

以上より、先行研究が報告したように男の子の70%以上が3歳で性自認をしていた。一方女の子は79%が3歳で性自認をしており、男の子の76%を上回っていた。この点は先行研究の「女児は40%しか自認できない」という報告とは異なっていた。いずれも男女による大きな差は見られず、3歳児クラスの大半の幼児は3歳の時点で性自認をしていたことが明らかになった。

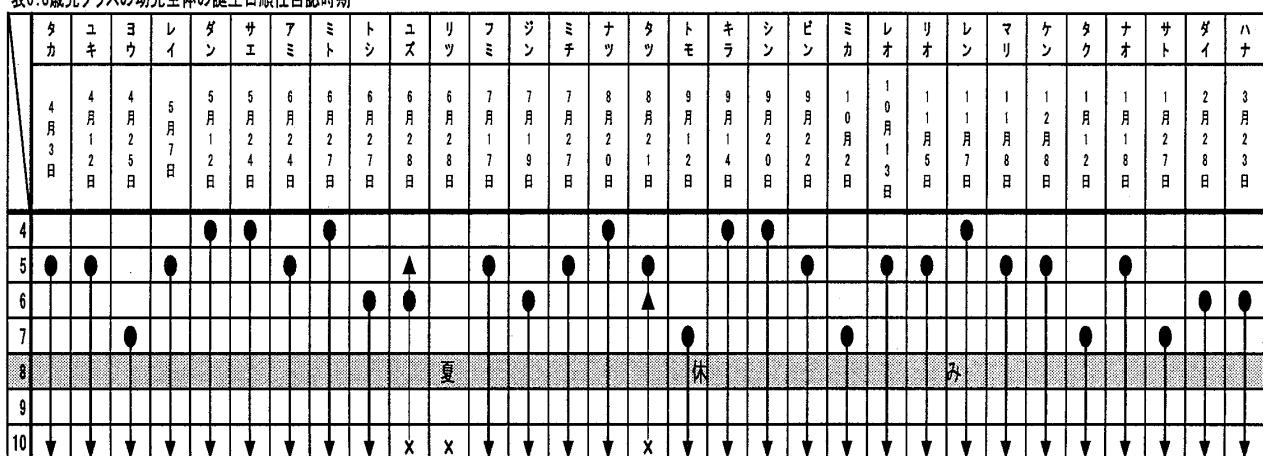
以上より、性自認時期には明らかな男女差および年齢差は見られなかった<sup>2)</sup>。

### 3. 誕生日順との関係

では性自認時期が早いか遅いかの違いはどのような要因によって生じているのだろうか。先行研究においては男女差の他に、発達の影響が指摘されてきた。次はこれを手がかりに、性自認時期に発達の影響があるのかについてクラス別に見てみよう。

社会学的アプローチからも「発達」の影響について検証可能なのは「各幼児の誕生日と性自認時期の関係を見る」という方法ではないだろうか。この方法をとることで、「発達」の影響が大きいならば多少の誤差はありつつも誕生日の早い子から順に性自認していく傾向があるはずである。一方、もしそういった傾向が見ら

表6:3歳児クラスの幼児全体の誕生日順性自認時期



れないならば、「発達」よりも環境の影響が大きいことが予想される。

こうした考え方のもと、以下に「各幼児の誕生日と性自認時期の関係」を見ていく。

表6は、各幼児の誕生日と性自認時期の関係について3歳児クラス全体の傾向を見るために作成した表である。全体の分布パターンを見てみると、個人差を考慮したとしても誕生日の早い子から順に性自認をしていく、という傾向は見られなかった。一方で、誕生日が離れた幼児同士がほぼ同時期に性自認するという現象が起きていたことが明らかになった。

#### 4. 兄弟姉妹の有無との関係

では、性自認にとっては「兄弟姉妹」の影響が大きい可能性も考えられるのではないか、という推測のもと、性自認時期と「兄弟姉妹」の関係について検証してみよう。

表7は、これ見るためによつて作成した表である。「兄姉あり」の幼児は20名、「兄姉なし」の幼児は11名であり、「兄姉あり」が「兄姉なし」の約2倍の人数であった。それを確認した上で、「兄姉なし」の幼児数を基準に、2倍にしたら何人になるか、そしてそれに対して「兄姉あり」は実際何名か、について検討し、表にしたのが以下の表8である。

表8は、母数をほぼ同数に合わせて比較可能にするために作成したものである。列に各児童が性自認した月、行を「兄姉あり」「兄姉なし」に分け、各セルに性自認した児童の人数を記入したものである。「兄姉なし」のカッコ内の数字が実際の数字、カッコ外の数字がそれを2倍した数字である。4月は「兄姉なし」の方が多く、5月は「兄姉あり」の方が多かった。そして6月も「兄姉あり」の方が若干多く、7月は「兄姉なし」の方が断然多かった。10月になっても性自認していなかった子は、同数であった。

以上より、4月と7月は「兄姉なし」の方が多く、5月と6月は「兄姉あり」の方が多かった。また、「兄姉

表7: 幼児の性自認時期と兄姉の有無の関係

表8: 兄姉有無間の比較

月	兄姉あり	兄姉なし
4	4	6(3)
5	9	6(3)
6	3	2(1)
7	2	6(3)
10	2	2(1)

「なし」は6月を除くと毎月同数が性自認していたのに対し、「兄姉あり」は4月と5月に集中していた。ただし、4月5月の人数を足すと、「兄姉あり」は13名、「兄姉なし」は12名でほぼ同数であった。一方6月7月を足すと「兄姉あり」は5名、「兄姉なし」は8名で「兄姉なし」の方が多かった。

以上より、性自認が遅かった幼児には「兄姉なし」が多く、性自認が早かった幼児にも「兄姉なし」は多く、「兄姉あり」だから性自認が早い、「兄姉なし」だから性自認が遅い、あるいはその反対、というような明確な傾向は見られなかった。

#### C. 各幼児の対人スタンスはいかなるものか(SQ3)

## 1. 保育者との関係のもち方

以上より、少なくとも Q 幼稚園の R 組・K 組においては「月」というミクロな時間軸で見た場合、性自認時期には環境の影響が大きいということが示唆された。

それでは実際にどのような環境要因、すなわち経験的要因が影響しているのだろうか。これにはさまざまな要因が考えられるが、幼稚園に限定して考えた場合、少なくとも「幼児と保育者の相互行為」「幼児同士の相互行為」という要因は重要な影響を与えていていることが推察される。

そのため、以下ではこれらの要因が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討していく。はじめに、「幼児の保育者との関係のもち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討する。

### 1.1. 「幼児の保育者との関係のもち方」

「幼児の保育者との関係のもち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討するためには、まず各幼児が保育者とどのような関係のもち方をしているのかを明らかにする必要がある。そのために以下の作業を行った。

まず、7月の夏休み前までの観察データから、列が「各幼児名」、行が「各幼児が保育者と一緒に行動した回数」および「保育者と話した回数」からなる表を作成し、観察日ごとにカウントした。これにより、「保育者とのコミュニケーションがある」タイプと「保育者とのコミュニケーションがない」タイプに分類した。「保育者とのコミュニケーションがある」タイプは毎回保育者との行動や会話が複数回あった子である。一方「保育者とのコミュニケーションがない」タイプは保育者との行動や会話が毎回0~1回というのが続いていた子である。

次に、同じく7月の夏休み前までの観察データから、各幼児の保育者との行動および会話の内容を整理した。これにより、「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」の4タイプに分類した。

「保育者べったり傾向」の子は常に保育者と一緒に行動していないと不安になるタイプで、保育者が見えなくなったときに泣き出してしまうようなタイプの子であった。

「保育者に同調傾向」の子は、保育者がいなくても遊べるが、保育者が言ったことに同調的な反応をしていた子である。たとえば、保育者が「してはいけない」と言ったことをしている子に対してとがめる、仲間にいやなことをされたときには保育者にいいつけに行く、などの行動をとっていた子をこのタイプに分類した。

「保育者に反抗傾向」の子は、保育者との接点は多いものの、保育者が言ったことに反抗的な反応をしていた子である。たとえば、保育者が「してはいけない」といったことをあえてした子や、保育者に注意された際に保育者の言うとおりにしなかった子をこのタイプに分類した。

「保育者と没交渉傾向」の子は、保育者とほとんど接点を持たなかった子である。このタイプの子は保育者から話しかけられた場合には接点を持つこともあるが、自分から話しかけることはめったになかった。

なお、「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」の子は「保育者とのコミュニケーションがある」タイプであり、「保育者と没交渉傾向」

表9：R組とK組の「幼児の保育者との関係のもち方」

	保育者とのコミュニケーションがある			保育者とのコミュニケーションがない
	保育者べったり傾向	保育者に同調傾向	保育者に反抗傾向	保育者と没交渉傾向
R組	レン	サエ・ナツ・シン・リオ・アミ・レイ・トシ・ダイ	シン・ミカ	サト・ヨウ・トモ・タク
K組	ユキ・ミチ・フミ・タツ・ユズ	ミト・ダン・ビン・ナオ・マリ	キラ・タカ・ケン・レオ	ハナ・リツ

の子は「保育者とのコミュニケーションがない」タイプであった。以上の作業を経て作成したのが、以下の表9である。

これは列にクラス名、行を「保育者とのコミュニケーションがある」と「保育者とのコミュニケーションがない」で分け、さらにそれを「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」に分けた。その上で各セルに該当する幼児名を記入したものである。

以上のように、R組・K組および3歳児クラス全体の「幼児の保育者との関係のもち方」を「保育者とのコミュニケーションがある」、「保育者とのコミュニケーションがない」および「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」に分類した。

### 1.2. 「幼児の保育者との関係のもち方」と性自認時期との関係

以上、「幼児の保育者との関係のもち方」について誰がどのような関係のもち方をしているのかについて見てきた。では「幼児の保育者との関係のもち方」と性自認時期はどのような関係にあるのだろうか。

表10は3歳児クラス全体の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」の4タイプと性自認時期との関係を見るために作成した表である。これを全体で見ると、最も早く4月に性自認した幼児は「保育者に同調傾向」のところに集中して分布しており、最も遅く6月7月に性自認した幼児は「保育者と没交渉傾向」のところに集中して分布していた。したがって、表10を以下のように変換してみる。

表10'は表10の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」の位置を入れ替えたものである。これを全体で見ると、多少の誤差はあるものの、おおむね「保育者に同調傾向」から「保育者と没交渉傾向」にかけて左上から右下に向けて斜めに分布していた。すなわち、保

表10:3歳児クラス全体の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」と性自認時期

	保育者べったり傾向										保育者に同調傾向										保育者に反抗傾向					保育者と没交渉傾向						
	レン	ユキ	ミチ	フミ	タツ	ユズ	サエ	ナツ	シン	ミト	ダン	リオ	アミ	レイ	マリ	ピン	ナオ	トシ	ダイ	キラ	タカ	ケン	レオ	ジン	ミカ	ハナ	サト	ヨウ	トモ	タク	リツ	
4	●						●	●	●	●	●								●													
5		●	●	●								●	●	●	●	●	●			●	●	●										
6																			●	●			●									
7																					●			●								
8																					休						み					
9																																
10																															x	

表10':3歳児クラス全体の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」と性自認時期

	保育者に同調傾向										保育者べったり傾向										保育者に反抗傾向					保育者と没交渉傾向						
	サエ	ナツ	シン	ミト	ダン	リオ	アミ	レイ	マリ	ピン	ナオ	トシ	ダン	レン	ユキ	ミチ	フミ	タツ	ユズ	キラ	タカ	ケン	レオ	ジン	ミカ	ハナ	サト	ヨウ	トシ	タク	リツ	
4	●	●	●	●	●	●													●		●											
5							●	●	●	●	●	●							●	●	●											
6													●	●									●									
7																							●			●	●	●	●			
8																			休							み						
9																																
10																															x	

育者に同調的なほど性自認時期が早く、保育者と関わりがないほど性自認時期が遅い傾向が見られた。

以上より、「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」の4タイプと性自認時期との間には「保育者に同調傾向」ほど性自認時期が早く、「保育者と没交渉傾向」ほど性自認時期が遅い傾向にあることが明らかになった。

さらに詳細に見ると、「保育者に同調傾向」のタイプの子はそろって性自認時期が早い傾向にあった。また「保育者べったり傾向」のタイプの子も早い傾向にあった。「保育者に反抗傾向」なタイプの子は少しばらつきが見られ、「保育者と没交渉傾向」なタイプの子はほぼ全員が全体で最も遅かった。

### 1.3. 「幼児の保育者とのコミュニケーションの有無」と性自認時期との関係

次に、「幼児の保育者との関係のもち方」(「保育者とのコミュニケーションがある」「保育者とのコミュニケーションがない」と性自認時期との関係について見てみよう。

表11は、3歳児クラス全体の「幼児の保育者との関係のもち方」(「保育者とのコミュニケーションがある」「保育者とのコミュニケーションがない」と性自認時期との関係を見るために作成した表である。これを全体で見ると、「保育者とのコミュニケーションがある」から「保育者とのコミュニケーションがない」にかけて、左上から右下に向けて斜めに分布していた。すなわち、保育者とのコミュニケーションがあるほど性自認時期が早く、保育者と関わりがないほど性自認時期が遅い傾向が見られた。

以上より、「幼児の保育者との関係のもち方」(「保育者とのコミュニケーションがある」「保育者とのコミュニケーションがない」と性自認時期との間には「保育者とのコミュニケーションがある」幼児ほど相対的に性自認時期が早く、「保育者とのコミュニケーションがない」幼児ほど相対的に性自認時期が遅い傾向にあることが明らかになった。

ここまででの知見をまとめると、3歳児クラスの幼児は最も単純化してみると、「保育者とのコミュニケーションがある」幼児ほど相対的に性自認時期が早く、

表11:3歳児クラス全体の「幼児の保育者との関係の持ち方」と性自認時期

	保育者とのコミュニケーションがある																				保育者とのコミュニケーションがない										
	レ	サエ	ナツ	シン	ミト	ダン	キラ	リオ	アミ	レイ	ユキ	ミチ	ヌミ	マリ	ピン	ナオ	タカ	ケン	レオ	トシ	ジン	ダン	ミカ	タツ	ユズ	ハナ	サト	ヨウ	トモ	タク	リツ
4	●	●	●	●	●	●	●	●																							
5						●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●												
6																				●	●	●					●				
7																					●						●	●	●	●	
8	夏				休				み																						
9																															
10																															

「保育者とのコミュニケーションがない」幼児ほど相対的に性自認時期が遅い傾向にあった。それをさらに詳細に見てみると、「保育者とのコミュニケーションがある」幼児の中では、「保育者に同調的」な幼児、「保育者べったり傾向」の幼児、「保育者に反抗傾向」の幼児、の順に性自認をしていったことが明らかになった。また、「保育者とのコミュニケーションがない」幼児である「保育者と没交渉傾向」の幼児は詳細に見ても、性自認したのが3歳児クラスの中で最も遅かった。

## 2. 仲間との関係のもち方

では次に、「幼児の仲間との関係のもち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討する。

### 2.1. 「幼児の仲間との関係のもち方」

「幼児の仲間との関係のもち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討するためには、まず各幼児が仲間とどのような関係のもち方をしているのかを明らかにする必要がある。そのために以下の作業を行った。

まず、7月の夏休み前までの観察データから、観察日ごとに、列、行ともに幼児全員の名前を並べた表を作成した。次に観察データから、この日に誰が誰と何回一緒に遊んだかをカウントしたものを各セルに記入した。この表をもとに、遊んだ回数が多くなった子同士を「よく一緒に遊んでいる子」として線でつないでいき、クラス全体の人間関係を図示した。これを観察日ごとに作成し、クラスの人間関係の推移をみた。

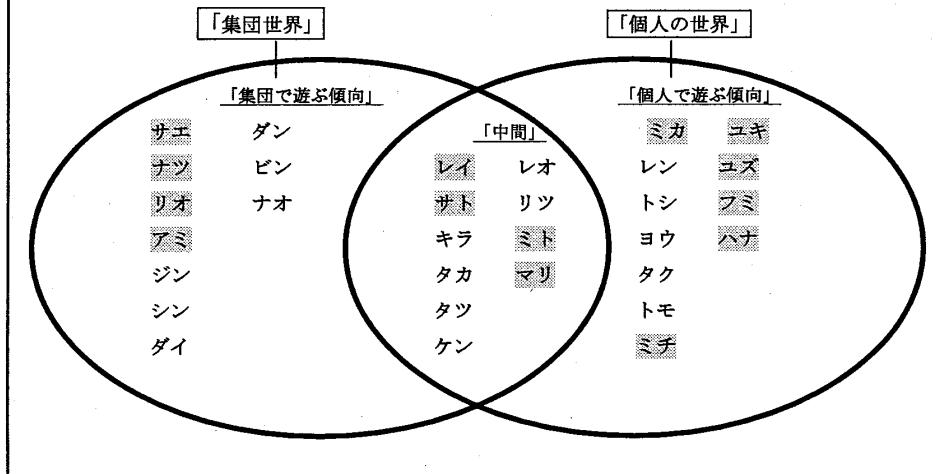
その上で、継続的に「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向」にある子、「個人で遊ぶ傾向」にある子、場面によってそのどちらにも属する「中間」の子、の3つのタイプに分類した。「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向」にある子というのは、いつも誰かと一緒にいないと遊ぶことができないタイプの子であった。そのため1人で遊ぶということはほとんど見られなかった。

「個人で遊ぶ傾向」にある子というのは、自分の世界を持っており、1人でも遊ぶことができるタイプの子であった。このタイプの子は必要があれば2人で一緒に遊ぶこともあったが、1人で遊べる度合いは他のタイプの子に比べると最も高かった。「中間」の子は、自分の世界を持っており、1人で遊ぶこともできるが、自分の必要性や興味にあわせてフレキシブルに集団で遊んだり1人で遊んだりするタイプの子であった。

以上の作業を経て作成したのが、以下の図2である。図2について見てみると、「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向の子」は10名、「個人で遊ぶ傾向の子」は11名、その両者に属する「中間の子」は10名、と3つのタイプともほぼ同数であった。

また、男女の分布について見てみると、「集団で遊ぶ傾向の子」と「中間の子」はともに「男：女=6名：4名」、「個人で遊ぶ傾向の子」は「男：女=5名：6名」であった。全体的に3つのタイプの間に大きな差はなかった。しかし詳細に見てみると、「個人で遊ぶ傾向の子」のみ女児の数が男児の数よりも多かった。全体で見ると「男：女=17名：14名」で女児の方が少ないことを考えると、女児は「個人で遊ぶ傾向の子」が相対的

図2:3歳児クラス全体の「幼児の仲間との関係のもち方」



に多かったとみることができる。

以上より、3歳児クラス全体の「幼児の仲間との関係のもち方」の傾向としては、3タイプともほぼ同数であり、男女の分布においても極端な偏りは確認されなかった。

## 2.2. 「幼児の仲間との関係のもち方」と性自認時期との関係

では「幼児の仲間との関係のもち方」と性自認時期はどのような関係にあるのだろうか。これについて以下に検討していく。

表12は3歳児クラス全体の「幼児の仲間との関係のもち方」と性自認時期との関係を見るために作成した表である。全体で見ると「集団で遊ぶ傾向の子」は相対的に性自認時期が早く、「個人で遊ぶ傾向の子」は相対的に遅かった。そして「中間の子」は両者の中間で、相対的に性自認が早い子と遅い子に分かれていた。

D. SQ1と3の関係はどうなっているのか(SQ4)

ここまで幼児の「保育者との関係のもち方」と性自認時期の関係および「仲間との関係のもち方」と性自認時期の関係について明らかにしてきた。では、「保育者との関係のもち方」「仲間との関係のもち方」「性自認時期」の3つの要素の関係はどのようにになっているのだろうか。これについて以下に検討する。

表13は、3歳児クラス全体の「保育者との関係のもち方」「仲間との関係のもち方」「性自認時期」の3つの要素の関係を見るために作成した表である。なお、表の下部には「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」ごとに「集団で遊ぶ傾向の子」「個人で遊ぶ傾向の子」「中間の子」がそれぞれ何%ずついるかについて数字を示した。なお、各幼児の「仲間との関係のもち方」については、「集団で遊ぶ傾向の子」を白、「中間の子」を薄いグレー、「個人で遊ぶ傾向の子」を濃いグレーで色分けした。

表12：3歳児クラス全体の「幼児の仲間との関係の持ち方」と性自認時期

表13:3歳児クラス全体の「仲間との関係の持ち方」「保育者との関係の持ち方」「性自認時期」の関係

	保育者とのコミュニケーションあり															保育者とのコミュニケーションなし																	
	保育者に同調傾向					保育者にべったり傾向					保育者に反抗傾向					保育者と没交渉傾向					個人で遊ぶ傾向												
	サエ	ナツ	シン	ミト	集団で遊ぶ傾向	ダン	リオ	アミ	レイ	マリ	ピン	ナオ	ダイ	トシ	レン	ミチ	ユキ	フミ	ユズ	タツ	キラ	タカ	ケン	レオ	ジン	ミカ	個人で遊ぶ傾向	個人で遊ぶ傾向	ヨウ	トモ	サト	リツ	
4	●	●	●	●																●													
5					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
6											●																●						
7																											●						
8					夏						休														み								
9																																	
10																				x	x											x	
集団	69%					0%					17%					0%																	
中間	23%					17%					67%					33%																	
個人	8%					83%					17%					67%																	

表13について見てみると、「保育者に同調傾向」の子の69%が「集団で遊ぶ傾向の子」、23%が「中間の子」、8%が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。大半が「集団で遊ぶ傾向の子」であった。また、「保育者べったり傾向」の子の83%が「個人で遊ぶ傾向の子」、17%が「中間の子」で、「集団で遊ぶ傾向の子」はいなかった。大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。そして、「保育者に反抗傾向」の子の67%が「中間の子」で最も多く、「集団で遊ぶ傾向の子」および「個人で遊ぶ傾向の子」はともに17%であった。最後に、「保育者と没交渉傾向」の子の67%が「個人で遊ぶ傾向の子」、33%が「中間の子」であり、「集団で遊ぶ傾向の子」はいなかった。大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。

以上より、「保育者に同調傾向」の子の大半が「集団で遊ぶ傾向の子」、「保育者べったり傾向」の子の大半が「個人で遊ぶ傾向の子」、「保育者に反抗傾向」の子の大半が「中間の子」、「保育者と没交渉傾向」の子の大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であったことが明らかになった。

さらに詳細に見ていくと、「保育者に同調傾向」の子の中で最も遅く性自認したトシは「個人で遊ぶ傾向の子」であった。そして、「保育者に反抗傾向」の子の中で最も遅く性自認したミカも「個人で遊ぶ傾向の子」であった。このことから、保育者と「同調的」あるいは

「反抗的」な形でコミュニケーションをとっていても、幼児同士のコミュニケーションがない場合は各タイプに該当する幼児の中で性自認時期が最も遅かったことが明らかになった。

また、「集団で遊ぶ傾向の子」は全員が「保育者とのコミュニケーションがある」子であった。さらに、幼児同士の集団で遊び、保育者に同調的なタイプはクラスで最も性自認が早かった子が多かった。そして、幼児同士のコミュニケーションがなくとも保育者にべったりくっついている子は性自認時期が比較的早かった。反対に幼児同士のコミュニケーションも保育者とのコミュニケーションもなかった子は性自認時期が3歳児クラス全体で最も遅かった。

以上より、「仲間との関係のもち方」「保育者との関係のもち方」「性自認時期」の3つの要因の間には、「集団で遊ぶ傾向」かつ「保育者とコミュニケーションがある」傾向(とくに「保育者に同調傾向」)をもつ幼児は3歳児クラス全体において性自認時期が相対的に早く、「個人で遊ぶ傾向」かつ「保育者とコミュニケーションがない」傾向(とくに「保育者と没交渉傾向」)をもつ幼児は性自認時期が相対的に遅い傾向があったことが明らかになった。また、幼児同士の関係においては「個人で遊ぶ傾向」を持っていても「保育者べったり傾向」にある幼児は相対的に性自認時期が早い傾向があった。

## V. 結論(考察)

### A. 「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かった理由

これについて考察するにあたり、まず「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かったのはなぜか、について考察する。では「集団で遊ぶことを好む」「保育者とコミュニケーションがある」という要因に共通するはどのような点だろうか。

まず第1に、幼稚園3歳児クラスで生活していく中で他者とのコミュニケーションを必要としている、という点が挙げられる。そして第2に、「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力を持つ人」に対して敏感である、という点が挙げられる。なおここで「権力を持つ人」という表現は以下のような意味合いで使用している。

すなわち、「保育者」「クラスで中心的な幼児」は「クラスにおける物事を進める際の絶対的な権限を握っている」という点、また、同時に「『男女間の非対称性』を他の幼児に対して提示する存在である」という点を満たしている存在である、という意味である。ここでは、この意味において「権力を持つ人」に限定して論じる。

以上2点より、このタイプの幼児は幼稚園3歳児クラスで生活していくにあたって「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている、と考えられる。

では「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児はなぜ性自認した日、すなわち「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かったのだろうか。これを考えるにあたり、まず「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」というのが幼児にとってどのような意味を持っているのかについて検討する。

多くの場合、これは少なくとも①「オンナノコ／オトコノコ」という言葉をいわれた時に自分が動く存在であるということを認識している状態であると考えられる。また、②自分以外の目印となる他者が動いた時に一緒に動いただけ、という可能性も考えられる。

ではこの2つの場合に、「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児が「保育者

に『オンナノコ／オトコノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かった、という現象はどのように説明できるだろうか。

まず幼児にとって「権力を持つ他者」としては「保育者」と「クラスで中心的な幼児」が考えられる。この二者はともに、幼児たちと関係をもつ際に「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を使用することが多いことが観察によって確認されている。具体的には「保育者は、幼児を統制する場面で「オンナノコ／オトコノコ」の2グループに分けて動かす目的で「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を使用することが多い。

また、「クラスで中心的な幼児」は「同性の幼児との結束を固める」および「異性を排斥する」という目的で主に遊び場面において「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を使用し、自らのクラスにおける地位を固めているという場面がみられる。

以上より、「権力者」は「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を媒介として幼児と関係を持つ、という方法をとっている、ということができる。

こうした状況の中で、「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児が「権力者」に従うためには、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉のおかれられた状況を的確に把握し、的確に動く必要がある。すなわち、幼稚園の中で自分が生きていくためには保育者に「オンナノコ／オトコノコ」という言葉で呼ばれた時に動けるようになる(=いち早く性自認をしておく)必要性が高い。そのためこのタイプの幼児は「保育者に『オンナノコ／オトコノコどうぞ』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かったのではないか、と考えられる。

前述のように、「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った」という現象は①「オンナノコ／オトコノコ」という言葉をいわれた時に自分が動く存在であるということを認識している状態、②自分以外の目印となる他者が動いた時に一緒に動いただけ、という2つの状態が考えられる。しかしいずれの状態であっても、「他者の指示に的確に従えるようになりたい」という幼児本人の意思が働いていることが推察される。①と②の違いは、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を目印として認識することで動けるようになるか、他者を目印として動けるようになるか、の違いである。つまり幼児本人にとって「権力者」の指示に的確に従うための手段の違いにすぎない。

いずれにせよ、以上のような理由から「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる必要性を感じる性質を持っている幼児にとっては「オンナノコ／オトコノコ」という言葉で動けるようになる必要性」が高い、と考えられる。

以上、「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かったのはなぜか、について考察した。

#### B. 「個人で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションが無い子」は性自認時期が相対的に遅かった理由

これをふまえ、以下では「個人で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションが無い子」は性自認時期が相対的に遅かったのはなぜか、について考察する。

では「個人で遊ぶ」「保育者とコミュニケーションが無い」という要因に共通するのはどのような点だろうか。

まず第1に、幼稚園3歳児クラスで生活していく中で他者とのコミュニケーションを必要としていない、という点が挙げられる。観察によって、このタイプの幼児は1人で遊ぶことができる子である、ということが確認されている。そのため第2に、前述のタイプとは異なり、「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力」を持つ他者に対して鈍感である、という点が挙げられる。以上2点より、このタイプの幼児は、幼稚園3歳児クラスで生活していくにあたって「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っていると考えられる。

では「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っている幼児はなぜ「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのだろうか。ここでは前述のタイプについての考察に対応させる形で考察する。すなわち、「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っている幼児は、「権力者」が使用する「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識しなくとも、幼稚園の中で生きていけるスキルを持っている。それぞれが「自分1人の世界」を持っており、その中で1人で遊ぶことができる。すなわち、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉で呼ばれた時に動けるようになる必要性が低い。そのためこのタイプの幼児は「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのではないか、と考えられる。

以上より、「集団で遊ぶことを好む」「保育者とコミュニケーションがある」という要因を持った幼児は、幼稚園で生きていくために「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性が高かったために「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早く、「個人で遊ぶ」「保育者とコミュニケーションが無い」という要因を持った幼児は幼稚園で生きていくために「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性が低かったために「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのである、と考察した。

言い換えると、幼児が「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早いか遅いかには、発達や男女差よりも幼稚園集団で生きていくまでの幼児の「他者との関係のどちらに関する意思」と「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性の高低」という2つの要因が関係している、ということが推察された。

これにより、幼児が保育者に「オンナノコ／オトコノコきてー」と呼ばれた時に保育者のところへ行く、という行動をするようになるまでには集団の影響が働いている、ということが示唆された。

#### C. 「オンナノコ／オトコノコ」という言葉と「権力」の関係

また、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉は何の意味も持たずにはまっさらなものとして幼児に提示され取り込まれるのではなく、提示された時点からすでに「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力者」との関係をもったものとして提示され、「権力者」の「権力」とセットのものとして「オンナノコ／オトコノコ」という言葉が認識され、とりこまれているのではないか、ということが推察された。

このことから、本研究において提示してきたデータだけでは論証できないが、相互行為場面を詳細に分析すれば、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉はこれから常に「保育者による統制」や「男が上、女が下、」という社会構造と連動した価値観などとセットで幼児の前に提示されている、という結果が出る可能性が推測される。この点については稿を改めて分析を進めていきたい。

(指導教員 恒吉僚子助教授)

## 注

- 1) 本研究の中で使用するデータにおける固有名詞は、場所、個人の特定を避けるため全て仮名にしてある。なお、幼児を対象に集団による教育が行われるもうひとつの機関として保育所がある。本研究が保育所ではなく幼稚園を対象として選択したのは以下の理由による。すなわち、保育所は入所時期や1日のうちに保育所にいる時間が個々の幼児によって異なる。一方幼稚園は原則として入園時期が揃っており、一日のうちに幼稚園にいる時間も全員揃っている。そのため、集団における社会的経験の影響の差が見やすい。以上の理由により、本研究は幼稚園を対象として選択した。
- 2) ただし、本研究はひとつの幼稚園の2クラスだけを調べたものであり、より多くのサンプルの検討の結果、異なる結果が出る可能性もある。そのため、少なくともQ幼稚園のR組・K組においては性自認時期には明らかな男女差は見られなかった、と述べるに留めておく。

## 引用・参考文献

- 青野篤子ほか著『ジェンダーの心理学』ミネルヴァ書房、2004
- 藤田由美子 2004 「幼児期における『ジェンダー形成』再考—相互作用場面にみる権力関係の分析より—」『教育社会学研究』第74集 329-348
- Judith Butler *EXCITABLE SPEECH*, Routledge, Inc, 1997 (=2004, 竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店)
- 河出三枝子 1991 「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—基本的考察と問題設定—」, 『岡崎女子短期大学研究紀要』第25号 1-12
- 河出三枝子 1992 「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—保育現場におけるジェンダー・プラクティスー」, 『岡崎女子短期大学研究紀要』第26号 11-35
- 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房, 2003
- 森繁男 1985 「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』31号 218-228
- 森繁男 1995 「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社
- 日本保育学会『日本の幼児の精神発達』, 1970
- 大滝世津子 2006a 「集団における幼児の性自認メカニズムに関する実証的研究—幼稚園における集団経験と幼児の性自認時期との関係—」『教育社会学研究』第79集
- 大滝世津子 2006b 「幼児同士の集団と幼児の性自認メカニズムの関係」, 大阪教育大学, 日本教育社会学会第58回大会報告原稿
- 齊藤耕二・菊池章夫編著『社会化的心理学ハンドブック』川島書店, 1990
- 相良順子 2000 「幼児・児童期のジェンダーの発達」伊藤裕子編『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房, 14-31
- 高橋恵子・柏木恵子編『発達心理学とフェミニズム』, ミネルヴァ書房, 1995, pp.6-7

土肥伊都子 1996 「ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成」『日本教育心理学研究』第44巻第2号 187-194

## 付記

調査にご協力いただいたQ幼稚園の園長先生はじめとした諸先生方、保護者の皆様、園児の皆様に心より感謝いたします。